

鉢木

觀阿弥作

世阿彌とも

前

ワキ 旅僧（最明寺）

ツレ 源左衛門妻

シテ 佐野源左衛門常世

後

ワキ 最明寺入道時頼

ツレワキ 最明寺侍臣

狂言 又其従者

地は 前は上野 後は鎌倉

「行方さだめぬ道なれば。く。來し方も何くならまし。」

「是は一処不住の沙門にて候。我此ほどは信濃の国に候ひしが。余りに雪深くなり候ふほどに。まづ此度は鎌倉に上り。春になり修行に出でばやと思ひ候。」

道行
「信濃なる。浅間の嶽に立つ煙。く。遠近人の袖寒く。吹くや嵐の大井山。捨つる身になき友の里。」

今ぞ浮世を離坂。墨の衣の碓氷川。下す筏の板鼻や。佐野の渡に着きにけり。く。」

ワキ詞
「急ぎ候ふほどに。上野の国佐野のわたりに着きて候。あら笑止や又雪の降り來りて候。此所に宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内申し候。ツレ
「誰にてわたり候ふぞ。」

ワキ
「是は修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。」

ツレ
「安き御事にて候へども。主の御留守にて候ふほど

に。御宿は叶ひ候ふまじ。

ワキ 「さらば御帰りまで是に待ち申さうするにて候。

ツレ 「それはともかくもにて候。わらは、外面へ出でもかひ。此由を申さばやと思ひ候。

シテ 「あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候ふらん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散乱し。人は鶴筆を着て立つて徘徊すと言へり。されば今ふる雪も。もと見し雪にかはらねども。我是鶴筆を着て立つて徘徊すべき。

カル

「袂も朽ちて袖せばき。細布衣陸奥の。今日の寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひよらずや。此大雪に何とて是にたゞみて御入り候ふぞ。

ツレ 「さん候修行者の御入り候ふが。一夜の御宿と仰せ候ふほどに。御留守の由申して候へば。御帰りまで御待ちあらうずるよし仰せ候ふほどに。是まで

参りて候。

シテ「さてその修行者はいづくに渡り候ふぞ。

ツレ「あれに御入り候。

ワキ「我等が事にて候。 いまだ日は高く候へども。 余りの大雪にて前後を忘じて候ふほどに。 一夜の宿を御かし候へ。

シテ「やすき御事にて候へども。 あまりに見苦しく候ふほどに。 御宿は叶ひ候ふまじ。

ワキ「いや／＼見苦しきは苦しからぬ事にて候。 ひらに一夜を御かし候へ。

シテ「留め申したくは候へども。 我等夫婦さへ住みかねたる体にて候ふほどに。 中々御宿は思ひもよらぬ事にて候。 是より十八町あなたに。 山本の里とてよき泊りの候。 日の暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。

ワキ「さてはしかと御借しあるまじいにて候ふか。

シテ
「御痛はしくは存じ候へども。御宿は参らせがたう

候。

ワキ
「あら曲もなや。よしなき人を待ち申して候ふ物かな。

ツレ
「あさましや我等かやうに衰ふるも。前世の戒行つたなき故なり。せめてはかやうの人に值遇申してこそ。後の世の便となるべけれ。然るべくは御宿を。参らせ給ひ候へ。

シテ詞

「さやうに思しめさば。何とて以前には承り候はぬぞ。いや此大雪に遠くは御出で候ふまじ。某追つ附き留め申し候ふべし。なふく旅人御宿参らせうなふ。余りの大雪に申す事も聞えぬげに候ふ。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ。今ふる雪に行方を失ひ。一所にたゞみて。袖なる雪を打ち払ひ打ち払ひし給ふ氣色。古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うちはらふ陰もなし。佐野

の渡りの雪の夕暮。かやうによみしは大和路や。

三輪が崎なる佐野の渡り。

「是は東路の。佐野の渡りの雪の暮に。迷ひつかれ

給はんより。見苦しく候へど。一夜は泊り給へや。

上歌
「げに是も旅の宿。く。仮初ながら值遇の縁。一

樹の陰のやどりも。此世ならぬ契なり。それは雨
の木陰。是は雪の軒旧りて。憂き寝ながらの草枕。
夢より霜や結ぶらん。夢より霜やむすぶらん。

シテ詞
「いかに申し候。お宿は申して候へども。何にても

候へ参らせうする物もなく候ふはいかに。

ツレ
「折節これに粟の飯の候ふほどに。苦しからずは参
らせられ候へ。

シテ

「さらば其由申し候ふべし。いかに申し候。御宿を
ば参らせて候へども。何にても参らせうする物も
なく候。折節これに粟の飯のあるよし申し候。苦
しからずは聞し召され候へ。

「それこそ日本一の事にて候ふ賜はり候へ。

シテ「なふ聞し召されうずると仰せ候。急いで参らせら

れ候へ。

ツレ「心得申し候ふ。

シテ「総じて此栗と申す物は。古へ世にありし時は。歌に読み詩に作りたるをこそ承りて候ふに。今は此栗をもつて身命を継ぎ候。げにや盧生が見し栄花の夢は五十年。其邯鄲の仮枕。一炊の夢のさめしも。栗飯かしく程ぞかし。あはれやげに我も打ちも寐て。夢にも昔を見るならば。慰む事もあるべきに。なふ御覽ぜよかほどまで。

地「住みうかれたる故郷の。松風さむき夜もすがら。寐られねば夢も見ず。何思出のあるべき。

シテ「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあて参らせ候ふべき。や。思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。之を切り火に焚

いてあて申し候ふべし。

ワキ
「げにく鉢の木の候ふよ。

シテ
「さん候某世にありし時は。鉢の木に好き数多木を集め持ちて候ひしを。かやうの体に罷りなり。いやく木ずきも無用と存じ。皆人に参らせて候ふさりながら。今も梅桜松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が秘蔵にて候へども。今夜のおもてなしに。之を火に焚きあて申さうするにて候。

ワキ
「いやく是は思ひもよらぬ事にて候。御心ざしはありがたう候へども。自然又お事世に出で給はん時の御慰にて候ふ間。中々思ひもよらず候。

シテ
「いやとても此身は埋木の。花咲く世に逢はん事。今此身にてはあひがたし。

ツレ
「唯いたづらなる鉢の木を。御身の為に焚くならば。

シテ
「是ぞ誠に難行の。法の薪と思召せ。

ツレ
「しかも此程雪ふりて。

シテ 「仙人に仕へし雪山の薪。

ツレ 「かくこそあらぬ。

シテ 「我も身を。

地 「捨人の為めの鉢の木。切るとしてもよしや惜しからじと。雪打ち払ひて。見れば面白やいかにせん。

先冬木より咲きそむる。窓の梅の北面は。雪封じて寒きにも。異木よりまづ先だてば。梅を切りや初むべき。見じといふ。人こそうけれ山里の。折

りかけ垣の梅をだに。情なしと惜しみしに。今更薪になすべしと。かねて思ひきや。桜を見れば春ごとに。花すこし遅ければ。此木やわぶると。心をつくし育てしに。今は我的みわびて住む。家桜きりくべて。緋桜になすぞ悲しき。

シテ 「さて松はさしもげに。

地 「枝をため葉をすかして。かゝりあれと植ゑ置きし。其かひ今は嵐吹く。松はもとより煙にて。薪とな

るもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守。衛士の
焚く火はお為めなり。よくよりてあたり給へや。

ワキ 詞
「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。

シテ 「御出でにより我等も火にあたりて候。

ワキ 「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ふぞ承
りたく候。

シテ 「いや某は名字もなき者にて候。

ワキ 「何と仰せ候ふとも。唯人とは見え給はず候。自然

の時の為にて候。なにの苦しう候ふべき。御名字
を承り候ふべし。

シテ 「此上は何をか包み候ふべき。是こそ佐野の源左衛
門の尉常世がなれる果にて候。

ワキ 「それは何とてかやうの散々の体にはなり給ひて候ふ
ぞ。

シテ 「其事にて候。一族どもに押領せられて。かやうの
身となりて候。

ワキ

「なふそれは何とて鎌倉へ御上り候ひて。其御沙汰
は候はぬぞ。

シテ

「運の尽くる所は。最明寺殿さへ修行に御出で候ふ
上は候。かやうにおちぶれては候へども。御覧候
へ是に物の具一領長刀一えだ。又あれに馬をも一疋
つないで持ちて候。是は只今にてもあれ鎌倉に御
大事あらば。ちぎれたりとも此具足取つて投げか
け。鋗びたりとも長刀を持ち。瘦せたりともあの
始まらば。

地
「敵大勢ありとても。く。一番に割つて入り。思
ふ敵と寄りあひ打ちあひて。死なん此身の。此ま、
ならばいたづらに。飢につかれて死なん命。なん
ぼう無念の事ざふぞ。

ロングワキ
「よしや身の。かくては果てじ只頼め。我世の中に
あらんほど。又こそ参り候はめ。暇申していづる

シテ、ツレ
なり。

「名残をしの御事や。始めはつゝむ我宿の。さも見
苦しく候へど。しばしば留まり給へや。

ワキ
「留まる名残のまゝならば。さて幾たびか雪の日の。

シテ、ツレ
「空さへ寒き此暮に。

ワキ
「いづくに宿を狩衣。

シテ、ツレ
「今日ばかり留まり給へや。

ワキ
「名残は宿にとまれども。いとま申して。

シテ、ツレ
「御出でか。

ワキ
「さらばよ常世。

シテ、ツレ
「また御入り。

地
「自然鎌倉に。御上りあらば御尋ねあれ。けうが
る法師なり。かひぐくはなけれども。公方の
縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなど。いひ
すてゝ出船の。共に名残や惜しむらん。く。
(中入)

後ジテ詞
「いかにあれなる旅人。鎌倉へ勢の上るといふは誠

ワキ 「国々の軍勢どもは皆々来りてあるか。

ツレワキ 「御前に候。

ワキ詞 「いかに誰かある。

シテ 「急げども。く。弱きに弱き柳の糸の。

地 「よれによれたる瘦馬なれば。
「打てどもあふれども。先へは進まぬ足弱車の。乗

みかねたる瘦馬の。あら道おそや。

か。何おびたゝしく上るさぞあるらん。東八個国
の大名小名。思ひくの鎌倉入り。さぞ見事にて
候ふらん。白金物打つたる糸毛の具足に。金銀を
のべたる太刀かたな。飼ひに飼うたる馬に乗り。
乗替中間きらびやかに。うちつれく上る中に。
常世が常にかはりたる。馬物具や打物の。物其も
のにあらざる氣色。さぞ笑ふらんさりながら。所
存は誰にも劣るまじと。心ばかりは勇めども。勇

ツレワキ 「さん候悉く参りて候。

ワキ 「其諸軍勢の中に。いかにもちぎれたる具足を着。さびたる長刀を持ち。痩せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方へ来れと申し候へ。

ツレワキ 「畏つて候。いかに誰かある。

狂言 「御前に候。

ツレワキ 「君よりの御諫には。諸軍勢の中にちぎれたる具足

を着。さびたる長刀を持ち。痩せたる馬を自身ひかへたる武者有るべし。急いで尋ねて御前へ参れとの御事にて候。

狂言 「畏つて候。いかに申し候。

シテ 「何事にて候ふぞ。

狂言 「急いで御前へ御参り候へ。

シテ 「何と某に御前へ参れと候ふや。

狂言 「中中の事。

シテ 「あら思ひよらずや。定めて人たがへにて候ふべし。

狂言 「いや／＼其方の事にて候。其子細は。諸軍勢の中に。いかにも見苦しき武者をつれて参れとの御事にて候ふが。見申せば其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に。さて申し候。急いで御参り候へ。

シテ 「何とたとへば諸軍勢の中に。いかにも見苦しき武者に参れと候ふや。

狂言 「中々の事。

シテ 「さては某が事にて候ふべし。畏つたると御申し候へ。

狂言 「心得申し候。

シテ 「げに／＼是も心得たり。某が敵人謀叛人と申し上げ。御前に召し出だされ頭を刎ねられん為めな。よしくそれも力なし。いで／＼御前に参らんと。大床さして見渡せば。

地 「今度の早打に。／＼。上りあつまる兵。きら星の

如く並み居たり。さて御前には諸侍。其外数人並み居つゝ。目を引き指をさし。笑ひあへる其中に。
シテ「横縫のちぎれたる。

地「古腹巻に鎌長刀。やうくに横たへ。わるびれたる氣色もなく。参りて御前にかしこまる。

ワキ詞

「やあ如何にあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か。是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今に

てもあれ鎌倉に御大事あるならば。ちぎれたりとも其具足取つて投げ懸け。鎌びたりとも其長刀を持ち。痩せたりともあの馬に乗り。一番に馳せ参づべきよし申しつる。言葉の末を違へずして。参りたるこそ神妙なれ。先々今度の勢づかひ。全く余の義にあらず。常世が言葉の末。誠か偽か知らん為めなり。又当参の人々も。訴訟あらば申すべし。理非によつて其沙汰いたすべき処なり。先々

沙汰の始めには。常世が本領佐野の庄。三十余郷
かへし与ふる所なり。又何よりも切なりしは。大
雪ふつて寒かりしに。秘蔵せし鉢の木を切り。火
に焚きあてし志をば。いつの世にかは忘るべき。
いで其時の鉢の木は。梅桜松にてありしよな。其
返報に。加賀に梅田。越中に桜井上野に松枝。合
はせて三箇の庄。子々孫々に至るまで。相違あら
ざる自筆の状。安堵に取り添へ給びければ。

シテ
「常世は之を賜はりて。

地
「常世は之を賜はりて。三度頂戴仕り。これ見給へ
や人々よ。始め笑ひしともがらも。是ほどの御気
色。さぞ羨ましかるらん。

地
「さて国々の諸軍勢。皆御いとま賜はり。古郷へと
てぞ帰りける。

シテ
「其中に常世は。

地
「其中に常世は。よろこびの眉を開きつゝ。今こそ

勇め此馬に。うちのりて上野や。佐野の舟橋とり
はなれし。本領に安堵して。帰るぞうれしかりけ
る。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第一輯』大和田建樹著